

尚美学園大学芸術情報研究 第25号 論文

雄々しき帝・黄帝

Huangdi : The Heroic Emperor

角屋 明彦

KADOYA Akihiko

[要約]

黄帝の伝説は春秋時代以降に生み出されたものである。そしてその内容はきわめて多岐に亘っている。数々の古典のなかでさまざまな伝説が黄帝像を断片的に描き出している。本稿はその断片をつなぎ合わせ、黄帝の全体像をつかもうとするものである。この作業にあたって、司馬遷の『史記』を基軸とする。そして他の古典をそこに加えてゆく。すると見えてくるものは「雄々しき帝」としての黄帝の映像である。やがて伝説は時代の推移とともに広がってゆき、〈天〉という概念に到達する。〈天〉とは天空であり、また天道でもある。黄帝は天空を翔け、天の摂理にかなった治世を行なった。それは「雄々しき帝」の到達点でもあった。

キーワード：

黄帝、伝説、『史記』、〈天〉

[Summary]

The legends of Huangdi (黄帝, the Yellow Emperor) emerged after the era of Chunqiu(春秋). These legends are extremely diverse in their content, with many classical sources presenting fragmented images of the varied legends of Huangdi. This paper connects these fragments, attempting to construct a total and complete image of Huangdi. The Shiji (史記) by Sima Qian (司馬遷) is the core source for this investigation, with other classical source materials being used to supplement the Shiji. This process reveals an image of Huangdi as a heroic emperor. With the passage of time these legends grew until reaching the concept of 〈Ten〉 (天). Ten can mean both the sky (the heavens) as well as divine providence. Huangdi soared in the sky and also governed the people according to this divine providence, the ultimate principle of Ten. This marks the arrival of the heroic emperor, Huangdi.

Keywords:

Huangdi, legend, *Shiji*, 〈Ten〉

序章

黄帝の名が古典に登場するのは、実はそれほど遠い昔のことではない。春秋時代以降に複数の人の手によって段階的に成書された『国語』、『春秋左氏伝』などが最も古いとされている。それよりも以前の古典にはその名が無い。しかし、それ以降の古典中には黄帝は頻繁に登場する。(その描写のさまざまは後述する。) 諸家の学術・思想の総合書である前漢の『淮南子』修務訓に、

○世俗の人、多く古を尊^{いにしへ}びて今を賤しむ。故に道を爲す者、必ず之を神農・黄帝に託し、而る後に能く説を入れる。

とあるように。古来、人々は「黄帝曰く……」と黄帝に仮託して自説を語った。同じ前漢の司馬遷は中国の歴史は黄帝に始まるとの認識を持ち、その『史記』を黄帝の事績から書き始め、自身が仕える武帝までを書き綴った。

○太子公曰く、余 黄帝より以来、太初に至るまでを述歴して、百三十篇^をに訖る。(『史記』太子公自序)

故にその『史記』第一篇・五帝本紀の書き出しが黄帝である。

司馬遷から一世紀以上の時が経って、後漢の班固が著した『漢書』のうちの芸文志はそれまでの古典群を体系的に整理した一大目録であるが、そのなかには黄帝の名を含む書、黄帝に関連する題名の書がかなりある。諸子略・道家に『黄帝四経』『黄帝銘』『黄帝君臣』『雑黄帝』『力牧^{りきぼく}』(力牧は黄帝の臣)。諸子略・陰陽家に『黄帝泰素』。諸子略・小説家に『黄帝説』。兵書略・兵陰陽に『黄帝』『封胡』『風后』『力牧』『鳩冶子』『鬼容区』『地典』(封胡・風后・力牧・鳩冶子・鬼容子・地典は黄帝の臣)。数術略・天文に『黄帝雜子氣』。数術略・曆譜に『黄帝五家曆』。数術略・五行に『黄帝陰陽』『黄帝諸子論陰陽』。数術略・雜占に『黄帝長柳占夢^{ちやうりゆう}』。そして方技略・医経に『黄帝内経』『外経』。方技略・経方に『泰始黄帝扁鵲^{へんたつ}俞拊方』『神黄帝食禁』。方技略・房中に『黄帝三王養陽方』。方技略・神僊に『黄帝雜子歩引』『黄帝岐伯按摩』『黄帝雜子芝菌』『黄帝雜子十九家方』の書名がある。これらは「黄帝書」と呼ばれているが、散佚し伝わっていないので内容がつかみ難い。

現代の中国医学において、所謂『黄帝内経』の素問や靈樞などの書はこの領域の基本古典であるが、何故に黄帝の名を冠しているのか、これまであまり考究されておらず、黄帝の權威を仮借して著された書であるとの理解に留まっていた。また、黄帝の人物像も三皇五帝の一人であるとして曖昧模糊としたままであった。しかし、1973年に前漢・馬王堆漢墓から出土した古文獻⁽¹⁾のうちの『経法』『十六経』『称』『道原』の四篇が上述の『漢書』芸文志にある『黄帝四経』ではなかろうかとの議論を呼び、それ以降、黄帝の人物やその思想が頓に話題に昇るようになってきたのである。⁽²⁾

本稿はこうして改めて光が照らされ注目されはじめた黄帝像を整理しようとするものである。

本章 黄帝伝説に見る黄帝

現在に生きる我々から見て、歴史の遙か彼方の人物のイメージとは、これまでの折々の

時代に生きた人々による修正や粉飾などを経て我々の心に映る映像である。黄帝のイメージもそれが昔から語り継がれてきただけに、そのイメージが複雑で、却って一つに結びにくい。しかし、まずもって黄帝の一般的なイメージは『史記』五帝本紀に描写されるものである。まず全体を以下に示す。

○黄帝は少典の子なり。姓は公孫、名は軒轅と曰ふ。生まれて神靈、弱にして能く言ひ、幼にして徇齊、長じて敦敏、成りて聰明なり。軒轅の時、神農氏の世衰ふ。諸侯相ひ侵し伐ち、百姓を暴虐す。而して神農氏 征する能はず。是に於て軒轅乃ち干戈を用ふることを習ひ、呂て不享を征す。諸侯 咸來りて賓從す。而して蚩尤 最も暴を爲すも、能く伐つもの莫し。炎帝 諸侯を侵陵せんと欲す。諸侯 咸 軒轅に歸す。軒轅乃ち德を修め兵を振へ、五氣を治め、五種を執え、萬民を撫で、四方を度り、熊・羆・貔・貅・貙・虎に教へ、以て炎帝と阪泉の野に戦ふ。三たび戦ひて、然る後、其の志を得。蚩尤 亂を作し、帝の命を用ひず。是に於て黄帝乃ち師を諸侯に徴し、蚩尤と涿鹿の野に戦ひ、遂に蚩尤を禽殺す。而して諸侯 咸 軒轅を尊びて天子と爲す。神農氏に代る。是を黄帝と爲す。天下に順はざる者有れば、黄帝従つて之を征し、平げば之を去る。山を披きて道を通じ、未だ嘗て寧居せず。東は海に至り、丸山に登り、岱宗に及び、西は空桐に至り、鷄頭に登り、南は江に至り、熊湘に登り、北は葷粥を逐ふ。符を釜山に合はせ、涿鹿の阿に邑す。遷徙往來して常處無く、師兵を以て營衛と爲す。官の名は皆 雲を以てし、命じて雲師と爲す。左右大監を置き、萬國を監せしむ。萬國和らぐ。而して鬼神山川の封禪は、與して多なりと爲す。寶鼎を獲、日を迎へ筴を推す。風后・力牧・常先・大鴻を擧げ、以て民を治めしむ。天地の紀、幽明の占、死生の説、存亡の難に順ふ。時に百穀草木を播き、鳥獸蟲蛾を淳化し、日月・星辰・水波・土石・金玉を旁羅し、心力耳目を勞勤し、水火材物を節用す。土徳の瑞有り。故に黄帝と號す。

ここには黄帝の多様な側面が描かれている。それを伝説として整理することを軸にして、他の古典の記述も加えてゆくことにする。(3) 但し、網羅することが目的ではなく、主たるものを手掛かりとして伝説の広がりを見ようとするものである。(以下、Aは上記の『史記』五帝本紀。B以降はその他である。)

①黄帝生誕伝説：人として誕生

①-A 黄帝は少典の子なり。姓は公孫、名は軒轅と曰ふ。

やがて黄帝となるその人物は天から降臨したのでもなければ、地から湧出したのでもなかった。人の子として誕生し、姓も名もある人であった。その姓は公孫、名は軒轅と言う。しかし、後漢の頃になると緯書のなかには彼の生誕が常人ではないことを伝えるものも出てくる。

①-B 附寶 郊野に之く。大電 樞星を繞み耀く。附寶に感じ、軒を生む。(『太平御覽』に引く『河圖握拒』)

①-C 大電 樞を繞み郊野を炤らす。附寶に感じて、黄帝を生む。(『太平御覽』に引く『詩含神霧』)

軒轅の母・附宝が郊外に行き、北斗七星の一番星の周りを稲妻がめぐるのを見て感応し、軒轅を生んだ、というのである。後漢の王充は出産まで母胎に二十ヶ月いたとしている。

①-D 傳に言ふ、黃帝は妊^{みごも}ること二十月にして生まる。性、人と異なる。故に母の身に在りて留まること十月多し。『論衡』吉驗)

①-E 母之を懷^{みごも}り、二十月にして生まる。其の月數を計るに、亦た已に二歳、母の身中に在るなり。『論衡』実知)

のちに晋の皇甫謐はこれを二十五ヶ月とする。

①-F 附寶 大電光の北斗樞星を繞み、郊野を照らすを見る。附寶に感じて孕むこと二十五月。黃帝を壽丘に生む。『太平御覽』に引く『帝王世紀』)

これらは黃帝の誕生をめぐる異常を言わんとするものであって、こののち黃帝奇誕伝説として展開してゆくことになる。

②黃帝神童伝説：神童として成長

②-A 生まれて神靈、弱^{じゃく}にして能く言ひ、幼^{えう}にして徇齊^{じゆんせい}。長じて敦敏^{ひととな}、成りて聰明なり。

軒轅は生まれた時からどこかしら神々しく人離れしたところがあり、幼^{いた}気ないのに言葉が話せて、幼い頃から身体の發育もよく、利発であった。そして心も頭もすくすくと立派になって、聡明な成人となった。のちの活躍を予想させる理想的な成長描写である。

③黃帝鎮世伝説Ⅰ：乱世の收拾に着手

③-A 軒轅の時、神農氏の世衰ふ。諸侯相ひ侵^{をか}し伐ち、百姓を暴虐す。而して神農氏征する能はず。是に於て軒轅乃ち干戈^{かんくわ}を用ふることを習ひ、呂^{もつ}て不享を征す。諸侯咸^{みな}來りて賓從す。而して蚩尤^{しいう} 最も暴を爲すも、能く伐つもの莫し。

当時は神農氏が統治する世であったが、諸侯が互いに侵略や攻伐をし、人民を虐げる有り様であり、神農氏も世相の混乱に打つ手がなかった。そこで武器の使用を鍛錬した彼は服^{まつろ}わぬ諸侯を懲らしめたので、諸侯は進んで軒轅を慕った。軒轅が世の中の秩序の回復に努め、次第に徳化していった様子が書かれている。しかし、それですべてが解決したわけではなかった。蚩尤なる者(後出の炎帝の子孫とも臣ともされる)が暴逆を行ない、誰もこれを討伐できなかった。

④黃帝鎮世伝説Ⅱ：炎帝と対立(前)

④-A 炎帝 諸侯を侵陵せんと欲す。諸侯咸 軒轅に歸す。

炎帝というのは神農氏の子孫であると言われている。その炎帝が巻き返しを図り、諸侯を勢力下に組み入れようと働きかけた。けれども諸侯はこぞって軒轅に従った。

⑤黃帝徳政伝説Ⅰ：徳政を施いて対決を準備

⑤-A 軒轅乃ち徳を修め兵を振^{ととの}へ、五氣を治め、五種^うを執え、萬民を撫で、四方を度り、……

軒轅が行なった準備とは徳政であった。兵制の整備は統治者なら誰でも行なうことであるが、五氣を治めた、とは木・火・土・金・水の五行の気を整えたというのであろうか。五種とは五穀をいう。農業を奨励して食料生産を豊かにし、人民の生活を安定させ、その安寧を国の東西南北四方に広げた。軒轅の善政は神農氏＝炎帝との対決準備という緊張下で運営されていたことになる。

⑥黄帝鎮世伝説Ⅲ：炎帝との決戦に勝利

⑥-A 熊・羆・貔・貅・貙・虎に教へ、以て炎帝と阪泉の野に戦ふ。三たび戦ひて、然る後、其の志を得。

⑥-B 炎帝は火災を爲す。故に黄帝、之を擒にす。（『淮南子』兵略訓）

⑥-C 黄帝 炎帝と天子爲るを争ひ、熊・羆・貔・虎をして以て阪泉の野に戦はしめ、三戦して志を得、炎帝 敗績す。（『論衡』率性）

軒轅は熊や羆などの猛獣を馴らして率い、阪泉の野で炎帝との三度の会戦を経て最後に勝利を収めた。これで長く続いた神農氏の勢力はほとんど終息したことになる。

⑦黄帝鎮世伝説Ⅳ：蚩尤を降し天下を平定

⑦-A 蚩尤 亂を作し、帝の命を用ひず。是に於て黄帝乃ち師を諸侯に徴し、蚩尤と涿鹿の野に戦ひ、遂に蚩尤を禽殺す。而して諸侯 咸 軒轅を尊びて天子と爲す。神農氏に代る。是を黄帝と爲す。天下に順はざる者有れば、黄帝従つて之を征し、平げば之を去る。

従わぬ蚩尤に対し、軒轅は諸侯を徴集して涿鹿の野で戦い、蚩尤を擒にして殺した。諸侯は軒轅を天子とし、神農氏の世は終わった。黄帝の成立である。そして帰順を善しとしない勢力があればそれを征伐していった。このくだりを別のものに見ると、

⑦-B 蚩尤は兵を作して黄帝を伐ち、黄帝乃ち應龍をして之を冀州の野に攻めしむ。應龍は水を畜へ、蚩尤は風伯・雨師に請ひて、大風雨を従はしむ。黄帝乃ち天女の魃と曰ふものを下せば、雨止み、遂に蚩尤を殺す。（『山海經』大荒北經）

ここには蚩尤との戦いの様子がAとは異なる描かれ方をしている。黄帝＝軒轅は応竜（臣下であり、水を支配する神）の水の力を用い、蚩尤側の風伯（臣下。風の神）・雨師（臣下。雨の神）の風雨の力と戦った。更には魃なる天女（黄帝の娘。旱魃を起こす神）を地上に下すと雨が止んで蚩尤を殺すに至った、とある。天候を司る神々の力のぶつかり合いとして描写されている。

⑧黄帝徳政伝説Ⅱ：名君として国政を執行

⑧-A 山を披きて道を通じ、未だ嘗て寧居せず。東は海に至り、丸山に登り、岱宗に及び、西は空桐に至り、鷄頭に登り、南は江に至り、熊湘に登り、北は葦粥を逐ふ。符を釜山に合はせ、涿鹿の阿に邑す。遷徙往來して常處無く、師兵を以て營衛と爲す。官の名は皆 雲を以てし、命じて雲師と爲す。左右大監を置き、萬國を監せしむ。萬國和らぐ。而して鬼神山川の封禪は、與して多なりと爲す。寶鼎を獲、日を迎へ筭を推す。風后・力牧・常先・大鴻を擧げ、以て民を治めしむ。天地の紀、幽明の占、死生の説、存亡の難に順ふ。時に百穀草木を播き、鳥獸蟲蛾を淳化し、日月・星辰・水波・土石・金玉を旁羅し、心力耳目を勞勤し、水火材物を節用す。

黄帝が治世に励んだことがさまざまに記述されている。道路整備をしながら東に、西に、南にと奔走。北では匈奴を駆逐。諸侯を集合させて割り符によって命令の遵守を管理し、軍隊を率いて移動。官職を命名して全国を管轄。天下が安定すると天地の神々を祭る封禪の儀を盛大に執行。すると天子のしるしである宝鼎を天から授かった。筮竹を用いて日月

の運行を数えて暦を制定。優秀な人材を活用して人民を治めさせた。天地の大法、幽明のト占、死生の儀礼、存亡の遷移、そうした理法に順った。季節に合わせた百穀草木を栽培させ、鳥獸虫蛾に至るまで淳和・教化した。徳がゆきわたって、日月星辰の運行は正しく、大地の河川や土砂も害をなさず、金や玉がたくさん出た。黄帝は身体のあらゆる力を使って事業に励み、水も火もその他の物も節度を守って活用した、と書かれている。こうした描写はさらにいくつかの部分に分けられ、あちこちの書に見ることができる。

⑧-B 黄帝 能く百物を成命して、以て民を明かにし、財を共にし、…(『國語』魯語上) あらゆる物に名を付け、人民を開明して、山河の産物を分かち合わせた、とある。

⑧-C 以て天地の紀、幽明の故、死生の説、存亡の難に順ふ。時に百穀草木を播し、故らに教化して、鳥獸昆蟲を浼ぐ。日月星辰を歴離し、土石金玉を極め畋り、心力耳目を勞し、水火材物を節用す。(『大戴禮記』五帝徳)

その徳が鳥や獸などにまで及ぶ名君であったことを言葉を連ねて記している。

⑧-D 黄帝の天下を治むるや、力牧・太山稽^{りよぐぼく たいざんけい}之を輔け、以て日月の行を治め、陰陽の氣を律し、四時の度を節し、男女を別ち、雌雄を異にし、上下を明らかにし、貴賤^{とう}を等し、強^{じやく}をして弱^{おほ}を掩はず、衆^{しやく}をして寡^{おほ}を暴^{しやく}げざらしむ。人民は命を保ちて夭せず、歳事は孰^{じやく}して凶ならず、百官は正しくして私無く、上下は調ひて尤無く、法令は明らかにして闇^{くら}からず、輔佐は公にして阿^{おも}らず。田者は畔^{わい}を侵さず、漁者は隈^{わい}を争はず、道には遺^おちたるを拾はず、市には豫^よ賈^かせず、城郭は關^{とぎ}さず、邑に盜賊無く、鄙^{ひりよ}旅の人は相ひ讓るに財を以てし、狗彘^{くてい}は菽粟^{しゆくぞく}を路に吐きて忿^{ふん}争^{さう}の心無し。是に於て、日月は精明に、星辰は其の行を失はず。風雨は時節あり。五穀は登孰^{かう}し、虎狼は妄^かりに噬^{してう}まず、鷙^{てう}鳥^うは妄^うりに搏^うたず、鳳皇^{てい}は庭^かに翔^かけ、麒麟^{きりん}は郊^{かう}に遊び、青龍^{せいりゆう}は駕を進め、飛黃^{ひくわう}は早に伏し、諸北儋耳^{しよへくせんじ}の國、其の貢職^{きんしやく}を獻ぜざるは莫し。(『淮南子』覽冥訓)

また、輔佐する人材にめぐまれ、黄帝がこれを活用したことは、

⑧-E 昔者、黄帝は蚩尤を得て天道を明らかにし、大常を得て地利を察し、蒼龍を得て東方を辨じ、祝融を得て南方を辨じ、大封を得て西方を辨じ、后土を得て北方を辨ず。黄帝 六相を得て天下治まるは神明の至れるなり。(『管子』五行)

とある。(上記の蚩尤は③-A、⑦-Aに登場する蚩尤とは別とされている。)ともあれ、有徳の君主にはそれを支える賢相が集まるということを言わんとしているようである。そして君臣一体となって徳政は施かれていく。

⑧-F 黄帝・唐・虞は帝の隆んなるなり。天下を資有し、制すること一人に在り。(『管子』法法)

黄帝と堯と舜を並べているが、いずれも天下を一人が掌握していたと述べている。加えて『管子』に言う。

⑧-G 黄帝の天下を治むるや、其の引かずして而^{すなは}ち來り、推さずして而^{すなは}ち往き、使はずして而^{すなは}ち成し、禁せずして而^{すなは}ち止む。故に黄帝の治や、法を置きて變せず、民をして其の法に安んぜしむる者なり。(『管子』任法)

黄帝のこうした精勤な治世は空間的にはきわめて広範な領域に及び、時間的には休みなく続けられた。その結果、黄帝の施く秩序は漢土全体に及んだのである。

⑧-H 黄帝の王たるや、山を童^{はげ}にし澤を竭^{つく}す。(『管子』輕重戊)

これは山林の伐採や沢沼の干拓を進めたことを言うのであろう。

⑧-I 中央の極は崑崙より東のかた兩恆山、日月の^ふ道る所、江漢の出づる所、衆民の野、五穀の宜しき所、龍門河濟相ひ貫き、息壤を以て洪水を埋めし州を絶^すぎ、東のかた碣石に至る。黄帝・后土の司る所のものにして、萬二千里なり。（『淮南子』時則訓）

⑧-J 東海を^{わた}り、江内に入り、緑圖を取り、西して積石を^{わた}り、流砂を^{わた}り、崑崙に登り、是に於て中国に還歸し、以て天下を平らかにす（『新序』脩政語上）

⑧-K 黄帝 徳を行なふとき、天矢^{てんし}之が爲に起こる。（『史記』天官書）

ここには黄帝の徳政に天が呼応して天矢星という星が出たと記されている。

⑧-L 黄帝・堯・舜は、衣裳を垂れて天下治まる。（『易』繫辭下）

為政者として齷齪と働かなくとも世の中は治まった、との意であろうか。決して手を拱いて何もしなかったわけではなく、その逆であるが、黄帝の治世を賛美する意図が読み取れる。

⑨黄帝始祖伝説：文明の始祖始元となる

黄帝は雲を守護神として万事を統治し、百官に雲の名を付けた。

⑨-A(部分) 官の名は皆 雲を以てし、命じて雲師と爲す。

⑨-B 黄帝氏は雲を以て紀す。故に雲師と爲りて雲もて名づく。（『春秋左氏傳』昭公十七年）

混乱の世を収めて秩序を定めたということから、黄帝がさまざまなものを創り出して、文明の始祖始元となったという伝説が膨らむ。

⑨-C 黄帝 陰陽を生じ、上駢^{じやうへん}耳目を生じ、桑林^{さうりん}臂手^{ひしゅ}を生ず。（『淮南子』説林訓）

陰陽とは男女であろうか。上駢なる神が耳と眼を作り、桑林なる神が臂と手を作った。

そしてまた黄帝は音律を定め、十二律・五音を調和させた。

⑨-D 黄帝 伶倫^{れいりん}をして律を作爲せしむ。……また伶倫に命じ、榮將^{えいしやう}と與に十二鐘^いを鑄、以て五音を和せしむ。（『呂氏春秋』仲夏紀）

黄帝自身がこれを行なったととれるものもある。

⑨-E 黄帝 其の緩急を以て五聲^{さくりふ}を作立し、以て五鍾^{しやう}を政し、其の五鍾^なに令づく。一に曰く、青鍾^{たいおん}は大音。二に曰く、赤鍾^{ちゆうしん}は重心。三に曰く、黄鍾^{さいくわう}は灑光。四に曰く、景鍾^{まいきめい}は昧其明。五に曰く、黒鍾^{いん}は隠其常。五聲既に調ひ、然る後に五行^{きじやう}以て天時を正し、五官以て人位を正すを作立す。人と天と調ひ、然る後に天地の美 生ず。（『管子』五行）

黄帝は次々にさまざまなものを生み出していった。

⑨-F 黄帝 始めて冠冕^{くわんべん}を制り、衣裳^{つく}を垂れ、棟^{むね}を上げ軒^{のき}を下し、以て風雨を避け、禮文法度ありて、事を興し業を創む。黄とは光なり。厚なり。中和の色なり。徳は四季に施し、地と功を同じくし、故に黄を先にして以て之を別にするなり。（『風俗通義』皇霸）

冠をかぶり、垂れた衣裳を着てゆったりと政務を執り、人々が住み、雨や風を凌ぐ家屋を建て、儀礼・文辞・法規・制度を整え、政事・政業を興して始めた。ここに黄色とは光輝き、重厚で、調和の色であり、その徳は四季を通じて施され、大地の力がすべてこもる。

それ故、黄の帝、黄帝が他に抜きん出るのである。後漢の書、『風俗通義』では黄帝という語の意味をそのように説明している。

⑨・G 黄帝 百物を正し名づけて以て民に明かにし、…（『禮記』祭法）

黄帝は実に多くの事物を分類し命名して、世に示し、秩序付けた。つまり中国文明の始祖始元であるというのである。

⑩黄帝土徳伝説土：土徳をもつ

⑩・A 土徳の瑞有り。故に黄帝と號す。

人である軒轅が黄帝となり得た根拠を五行思想によって説明しようとする一群の伝説がある。

⑩・B 凡そ帝王なる者の將に興らんとするや、天 必ず先づ祥を下民に見(あら)はす。黄帝の時、天 先づ大蟪・大螻を見はす。黄帝曰く、土氣勝つと。故に其の色は黄を尚び、其の事は土に則る。（『呂氏春秋』有始覽）

ここには天の現した瑞祥が大ミミズと大ケラであったと書かれている。黄帝が土徳をもつ人であるがために「黄帝」の帝号を得たというのである。

⑩・C 黄帝 土徳を得、黄龍・地蟪 見はる。（『史記』封禪書）

⑩・D 中央は土なり。……其の帝は黄帝、……其の蟲は倮、其の音は宮、律は黄鍾の宮の中り、其の數は五、其の味は甘、其の臭は香、其の祀は中霤、祭るには心を先にす。（『呂氏春秋』季夏紀）（『禮記』月令に同一文がある。）

⑩・E 中央は土なり。其の帝は黄帝、……其の神を鎮星と爲す。其の獸は黄龍、其の音は宮、……。『淮南子』天文訓）

以上、司馬遷が五帝本紀の冒頭の記述を軸として、他の古典中に関連記述を拾い出して整理した。しかし黄帝にはさらに多様な伝説が存在する。

⑪黄帝醜妾伝説：醜女の後を愛す

⑪・B 嫫母 黄帝に執ばる。黄帝曰く、女に徳を厲せば忘れず、女に正しきを與ふれば衰へず。惡しと雖も奚ぞ傷まんと。（『呂氏春秋』孝行覽）

嫫母は黄帝の後の一人であった。醜女であったとされているが、「徳を高くせよと励ませばおまえはそれを忘れない。正しいことを教えればおまえはそれを疎かにしない。醜くとも差し支えはない」と、黄帝は言う。外見の如何にかかわりなく本質を理解しようとした。黄帝の人柄を伝える話である。後世にもこの黄帝・嫫母のことは語り継がれる。

⑪・C 夫れ好容は人の好む所なれば、其の遇ふは固に宜なり。或いは醜面惡色を以て、上に稱媚せらる。嫫母・無鹽是れなり。嫫母は黄帝に進められ、無鹽は齊王に納れらる。（『論衡』逢遇）

⑫黄帝竜縁伝説：竜との深い縁

まず、黄帝自身が「竜顔」であったというものがある。竜顔とは眉のあたりの骨が丸く高く出た人相である。またこの語は天子の顔を意味する。

⑫・B(部分) 黄帝は龍顔なり。（『論衡』骨相）

⑫・C 其の相 龍顔なり。（『潜夫論』五徳志）

そして黄帝が、臣下であり、水を支配する神である応竜を使って蚩尤と戦ったことは既に引用した。

⑦-B 蚩尤は兵^{おこ}を作して黄帝を伐ち、黄帝乃ち應龍をして之を冀州の野に攻めしむ。
(『山海經』大荒北經)

また、黄帝が竜の飾りがついた乗り物に乗っていたとするものもある。

⑫-D 黄帝、……黼黻^{ふふつ}して大帶・黼裳^きを衣、龍に乗り、雲を扈^{いた}し、……(『大戴禮記』五帝德)

天子の礼服を身にまとい、車には竜の飾り、屏風は雲の模様、……とある。

⑫-E 黄帝 鬼神を泰山の上に合^{あつ}む。象車に駕^{かう}して蛟龍^{ひつはう}を六にす。畢方 鍔^{かつ}に竝び、蚩尤前に居り、風伯 進んで掃ひ、雨師 道に灑^{そそ}ぎ、虎狼 前に在り、鬼神 後に在り、螭蛇^{とうだ} 地に伏し、鳳皇 上を覆ふ。(『韓非子』十過)

⑫-F 黄帝 象車・六交龍に駕し、畢方 轄^{さつ}を竝べ、蚩尤 前に居り、風伯 進んで掃き、雨師 道に灑ぎ、虎狼 前に在り、鬼神 後に在り、蟲蛇 地に伏し、大いに鬼神を太山の上に合む。(『風俗通義』聲音)

これらには、象牙の飾りの車に乗って六頭の竜がこれを引き、鬼神たちを従えた勇ましい様子が描かれている。黄帝を莊嚴するにはやはり竜が必要なようである。

⑬黄帝登天伝説：天に登る

そして黄帝は竜に乗って天に登っていった。

⑬-B 黄帝 首山の銅を采り、鼎を荆山の下に鑄る。鼎 既に成るや、龍の胡髯^{こぜん}を垂れ、下りて黄帝を迎ふる有り。黄帝 上りて騎り、羣臣後宮の従ひて龍に上るもの七十餘人、龍乃ち上り去る。餘の小臣は上るを得ず。乃ち悉く龍髯を持てば、龍髯拔け、黄帝の弓を墮^{おと}す。百姓 黄帝の既に天に上るを仰ぎ望み、乃ち其の弓と龍の胡髯とを抱き號す。(『史記』封禪書)

黄帝が首山の銅で鼎を鑄ると竜が髯^{あごひげ}を垂らして空から降りてきた。黄帝は竜に乗って天翔る。群臣や女官も竜に乗るが、乗り切れない。あぶれた者は髯に取り付くけれども髯が抜けてしまう。落ちてきた黄帝の弓とその髯を抱いて、地上に残された者たちは泣き叫ぶ。黄帝は竜に乗って天に消える。

⑬-C 世に稱す。黄帝は龍に騎^のり天に升ると。(『論衡』龍虚)

⑭黄帝余德伝説：死してのちも人々に慕われる

⑭-A 黄帝 崩^{けうざん}ず。橋山に葬る。(本章冒頭引用部分のつづき)

⑭-B 黄帝は貴きも死せり。(『呂氏春秋』慎行論)

⑭-C 黄帝の子は二十五人なり。(『國語』晉語四)

あれほどの貴人・黄帝も死を迎えた。黄帝は多くの子を残し、人として亡くなったのである。神として消えたのではなかった。そして人々は黄帝を慕った。その仰慕が黄帝の寿命が途方もなく長いものであったとする話につながる。

⑭-E 黄帝は三百年なり。(『大戴禮記』五帝德)

しかし、同じ出典にこれに続いて、

⑭-F 生きては民の其の利を得ること百年、死しては民の其の神を畏ること百年、亡

びては民の其の教へを用ひること百年なり。(『大戴禮記』五帝徳)

黄帝は現世に百年の寿を保ち、その間、人々はその恩徳にあずかった。黄帝が亡くなって百年の間、人々は黄帝のみ魂を畏れかしこみ、その後また百年、人々は黄帝の教えを守り続けた。これは黄帝が三百歳であったとされることの合理的説明である。

⑮黄帝順天伝説：天の摂理を心得た帝

⑮-B 黄帝曰く、芒芒昧昧として天の威に^よ困り、元と氣を同じくすと。(『呂氏春秋』有始覽)(『淮南子』泰族訓に同一文がある。)

⑮-C 黄帝曰く、芒芒昧昧として天の道に従ひ、元と氣を同じくすと。(『淮南子』繆稱訓)

黄帝の思想を伺い知る記述である。黄帝は言う。己を無にし、天の威・道に添い、天の根元である元氣に従おう。

⑮-D 黄帝曰く、四時は之れ正せず、五穀を正すのみ。(『呂氏春秋』土容論)

黄帝は言う。天の摂理を変えるのではなく、摂理に従順に人間は時宜を得た行ないをすることこそが肝要である。黄帝は天の摂理を心得てそれに順う帝であったと描かれる。

⑮-E 黄帝 天に^{のつと}法り地に^{のつと}則り、四聖 序に遵ひて、各々法度を成す。(『史記』太史公自序)

以上、多岐に亘る断片的な黄帝の伝説を『史記』五帝本紀を基軸として整理した。

終章

『史記』太史公自序において司馬遷自身が端的に言う。黄帝は天の秩序に順って国造りをし、それに続く諸聖帝もそれぞれ法規・制度を整えたのであると。(⑮-E) 天の摂理を心得てそれに順って民を治め、多くのものを創り出し、やがてその天に登っていった黄帝であった。黄帝の偉大さを表わす言葉として〈天〉という言葉ほどふさわしいものは他にないだろう。黄帝の伝説は時とともに成長し、〈天〉を内包するに到ったのである。『史記』などの歴史書は記録性に重点があり、『呂氏春秋』や『淮南子』などの総合書は網羅性を重視する。それぞれ性格を異にするものの、いずれも黄帝に関する伝説を採録し、後世に伝えようとしたものである。そうした断片的なさまざまの伝説は、時にはつながりあい、重なりあい、また時には分かれて展開してゆき、ほぼ前漢時代初期までに黄帝のイメージが創り上げられたのである。それは超人といえるほどに健常で理想的な君主、まさしく「雄々しき帝」であった。

伝説のモザイクは結合や分裂を繰り返して変容してゆくものである。黄帝の伝説はそうした過程で〈天〉という概念に到達した。ここに〈天〉とは天空であると同時に、また天道でもある。黄帝は天空を翔け、天の摂理にかなった治世を行なった。それは「雄々しき帝」の到達点であった。そして〈天〉を内包するに到った黄帝像はそれゆえに新たな展開をしてゆくことになるのである。それについては稿を改めて述べることにする。

注

- (1) 中国の研究者による最近のものでは、裘锡圭主编、《长沙马王堆汉墓简帛集成》、中华书局、2014年6月などがある。日本の研究者による研究蓄積も、山田慶児編、『新発見中国科学史資料の研究：訳注篇』、京都大学人文科学研究所、1985年3月、同じく、山田慶児編、『新発見中国科学史資料の研究：論考篇』、京都大学人文科学研究所、1985年12月、以降、その層は厚いものになってきている。近藤浩之、「馬王堆漢墓関係論著目録」、『中国出土資料研究』、1、中国出土資料研究会、1997年3月などを併せて参照されたい。
- (2) 邦訳では、澤田多喜男訳註、『黄帝四経：帛書老子乙本卷前古佚書』、知泉書館、2006年8月などがある。
- (3) 主として前漢までの古典から引用するが、後漢あるいはそれ以降のものも必要最小限度を傍証として用いる。尚、いずれも著名な古典であるので、煩雑を避け、版本・校勘に関する逐一の注記を省くこととする。